慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

3号館南棟竣工式

8月の業務開始に先駆けて建物が完成

4月25日に、竹中工務店取締役社長竹中統一様、三菱地所設計取締役社長小田川和男様、清家塾長にご列席賜り、3号館南棟の竣工式が取り行われた。これまで「新棟」と呼んできた2号館が出来て以来の、25年ぶりの診療部門の新築となる。また、北棟と合わせて3号館が完成することになった。2号館とも公道の上に掛けられた吊り橋構造の渡り廊下でつながり、臨床研究棟から北棟を経て2号館まで繋がることになる。

3号館南棟の工事は、昨年の平成23年2月に始まった。3・11の大震災を受けて完成が遅れることが心配されたが、竹中工務店の努力により、1年という短期間で、予定通りに竣工までこぎ着くことが出来、大変感謝している。

三菱地所設計、竹中工務店さんにお願いして、工事の開始時から1カ月に一度程度の割合で、工事の進捗状況、工事内容、発生した問題点や工夫などの説明を受けてきた。また、説明の後には現場視察をさせて頂いた。これは我々にとって大きな収穫になったと思う。単に外から見ているだけでは分からない事も、説明を受けることで理解でき、工事を担当しておられる皆さんの苦労を垣間見ることが出来た。

建物が完成し、引き渡しを受けたことで、これまでの竹中工務店の仕事から、病院の仕事に引き継がれた。業務開始の8月を目指して、医療機器を入れることで、建物を病院として作り上げる作業になる。特に、放射線関連の機器に関しては、種々の許認可を取得し、試運転を行う必要がある。さらにその先には、医療チームによる建物を病院として機能させることが必要である。文字通り、病院としての命を吹き込むことになる。そこでは、次の時代の医療を目指して、慶應醫学を結集した診断・治療の提供、電子情報に基づいた新しい仕組みによる医療の提供に加えて、慶應病院を求めてこられる患者さんの要求に答えられる、慶應醫学の心を持った医療の提供を目指して準備に取り掛かっている。病棟には、食事内容の向上や種々の手続きの簡略化を図り、治療に専念できるような環境の整備に取り組んでいるが、最も大切なことは、自分たちの行おうとしている医療内容をしっかりと見定め、変えて行く志であり、その成果が出ることが試されているとも考えている。新病院等に向けて行くための一里塚となるように、大切に育て上げていきたい。

竣工式は建設関係者のみで行ったが、7月には南棟のお披露目を予定しており、多くの関連ある諸先生方にお越しいただきたい。

（病院長　武田純三　麻52回）

完成した3号館南棟の外観

念願の渡り廊下も完成

医工連携シンポジウム開催

高精細映像高速光伝送システムが開く医学医療の未来

平成24年4月25日、竣工なった3号館南棟に隣接する北棟一階にある「がん低侵襲療法研究開発センター」ラウンジで、医工連携シンポジウムが開催され、理工学部・KeioPhotonics Research Institute（KPRI）所長の小池康博所長・教授が開発した高精細高速光伝送ファイバーの最先端技術を医学・医療にどのように応用できるかについて活発な議論がなされた。

シンポジウムには青山藤詞郎理工学部長、北里一郎義塾理事、比企能樹義塾理事・三四会長、北城恪太郎義塾評議員が出席された。北川雄光医学部腫瘍センター長のあいさつに始まり、小池教授による先端技術基盤の講演があった。教授が心血を注いで開発されたプラスティック光ファイバーは、プラスティックポリマーの物理的特性や光の振る舞いを巧みに利用して光の高速度伝達を可能にしたものであり、ラグタイムのないリアルタイム伝送による内視鏡手術遠隔指導システムへの応用が期待できる。

シンポジウムでは矢作直久教授が、3号館北棟地下1階での中動物実験室における内視鏡手術の訓練の模様が実況中継され、教授と遠隔スタッフが寸分のずれなく指示どおりに内視鏡を操作させる様子が上映され、その性能が如何なく発揮された。さらにシステムデザインマネジメント研究科の当麻哲哉准教授が新しいディスプレイを用いた3次元画像伝送の説明を行い、その中で医学部解剖学教室・クリニカルアナトミーラボの今西宣晶准教授らが開発した医学教育・解剖実習用の3次元画像コンテンツのデモを行った。このファイバーを利用した光伝送システムと新型スクリーンの組み合わせは今後の医学教育にも革命的なインパクトをもたらすであろう。

小池ファイバーと高精細スクリーンは通常の液晶スクリーンでは解決できないような、色が変化しない特性、比類のない軽量性と柔軟性、スクリーンを薄くできるメリットなど多くの優秀な特性を有し、スペースの限られた医療現場で多くの医療スタッフが同時に情報を共有するディバイスとして、あるいは将来的には遠隔病理診断などの微妙な染色の色合いが問題になるような領域でも世界最先端技術として広まっていくインパクトを持つと思われる。

具体的な共通目標を持った塾の医工連携を推進すること、小池ファイバーの技術が新病院でも威力を発揮することを通じて、慶應発の理工学技術革新がますます発展することを願ってやまない。

（医学部長　末松　誠　医化62回）

（左から）末松医学部長、小池所長、青山理工学部長

3Dメガネをかけて三次元画像を見る

第1回 慶應義塾大学 ヘルスサイエンス・ラボシンポジウム開催

第1回慶應義塾大学ヘルスサイエンスシンポジウムが、4月27日に三田キャンパス北館ホールにて開催された。昨秋に発足した慶應義塾大学SFC研究所ヘルスサイエンス・ラボの取り組みを内外に紹介することを目的とした催しである。

午後2時に開演したシンポジウムでは、始めに村井純環境情報学部長が壇上に上がり、健康に対する社会的要求が高まっている中、食事・運動・医療・介護といった多岐にわたる分野が連携することの必要性を力説した。また、遠隔医療においてはリアルタイムで高精細な映像通信が必要であるため、情報処理の観点から見ても最も挑戦的な分野の一つであると述べた。「物事を統合的に捉える」ことは湘南藤沢キャンパス設立の理念と通じるものであり、この夢と希望に溢れた分野を義塾全体で責任をもってサポートしていきたいと締めくくった。また、来賓として出席した農林水産省の針原寿朗食料産業局長は、ラボの成果を将来の政策に活かし、来たる高齢社会の健康・介護の分野に役立てたいと期待を示した。

続いて会は第一部「長寿の国日本に必要なサイエンス」に移り、医学部眼科教授でラボ代表の坪田一男氏が「今、日本に必要なヘルスサイエンス」について講演を行った。坪田教授は多くの眼病患者の治療に成功した経験からエイジングに対する考えが変化したとのことで、加齢とは生物学的プロセスであるが故に人為的に介入できる素地があると確信したという。具体例として、エイジングは必要以上のカロリーを摂取することが原因とする「カロリス仮説」や、生体内で酸化が起きることが原因とする「酸化ストレス仮説」、小容量のストレスは防御生体反応を起こし生体に有用であるとする「ホルミーシス仮説」などを挙げるとともに、長い間サイエンスの対象にならなかった幸福を科学的手法で評価できるようになったのは大きな進歩だと述べた。今後は各機関と連携して食、運動、心という3つのアプローチからヘルスサイエンスを追究し、基礎研究を発展させて最終的には新産業の創出まで行いたいとの意気込みを見せた。

次に、環境情報学部准教授で同じくラボ代表の神成淳司氏から「食とヘルスサイエンス」として、健康の維持増進を目的とした食への様々なアプローチが紹介された。具体例として、作物の多様な成分の非侵襲測定、生育メカニズムの解明、ITを活用した熟練農家の「判断」解明と意思決定支援システム構築などが挙げられた。これまでの売り切り型モデルからマネジメントモデルへと舵を切ることで、諸外国に対する日本農業の差別化と競争力の育成を図るとのことである。

会はその後、三村将医学部精神科教授による「脳と心のヘルスサイエンス」の講演を経て、ディスカッションに移った。これまでの内容や用語についての質問がなされ、講演者同士で質問をし合うシーンも見られるなど、意義のある時間となった。休憩を挟んで開かれた第二部でも、引き続き井上浩義氏、川原尚行氏、和田智之氏、渡辺光博氏らによる講演と活発な議論が行われ、戸山芳昭医学部整形外科教授の閉会の言葉でシンポジウムは幕を閉じた。会場はほぼ満席となり、ラボの順風満帆な船出を象徴する賑わいとなった。

（4年　森田篤帆）

ほぼ満席となった会場

ヘルスサイエンス・ラボではニュースレターも発行

2012年度版 イマドキの慶應医学生

4月2日、慶應義塾大学の入学式が執り行われた。今年度慶應義塾大学医学部に入学した新入生は113人。近年の慶應医学部への新入生はどのような背景を持ち、どのような考えを抱いているのかを調査するため、新入生全員にアンケートを行い、「イマドキの慶應医学生」としてここにまとめた。アンケート内容は、1、家族・親戚に医師はいるか、2、将来は臨床・研究のどちらに進みたいか、3、理想の医師像とは、である。

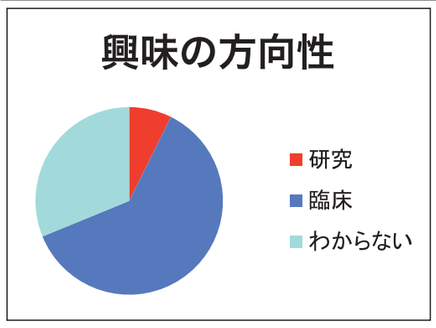
家族・親戚に医師はいるかという質問への回答は、『1人いる』が16人、『2人いる』が18人、『3人以上いる』が9人いた。家族・親戚に医師がいる者が多く入学しているかと思われたが、実際はそうではない者が過半数を占めていた。これは、メディアで医師の姿が多く描かれるようになったことなどにより、医学部の門戸が徐々に開かれ、身近に医師がいない者でも医学界に興味を持つ様になったことを表しているのではないだろうか。また、気になった点としては、家族・親戚に医師が1人いると答えた者より、2人以上と答えた者の方が多く、4人と5人と答えた者が計4人いるという結果になったが、これは医師の家系に育った者は医師を継ぐことが多いということを示唆すると考えられる。

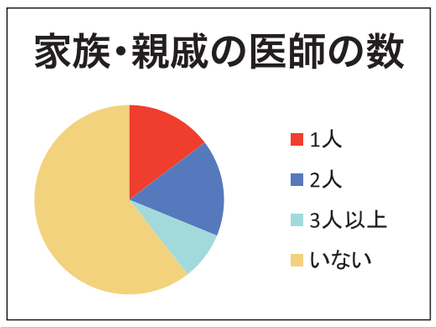
研究・臨床のどちらに進みたいかという質問については、研究が3人、臨床が67人、わからないが34人であった。このように圧倒的に臨床という回答が多い結果となったことから、患者を治療する医師を夢見て医学部を志している者が多い、ということがわかる。『わからない』と回答した者も、次の「理想の医師像」についての質問では、患者と対面して診察し、治療することを前提とした回答をしている者が多い。本学部に入学する者は入学時点では臨床医を積極的に志しているようである。一方で、研究に進みたいと答えた3名は臨床ではなく研究の道で成果を挙げたいというはっきりとした希望を抱いており、本学への入学者が入学時から卒業後のことをある程度考えていることがわかり、層の厚さを感じさせる。

最後の質問である、「理想の医師像について書いて下さい」という質問への回答としては、患者に親身になって思いやれる医師、という回答と、技術力の高い医師、という回答が多かった。これは、先の質問で臨床に進みたいと答えた者が多かったことと関連し、患者に寄り添えて、かつ確実な治療を施せるように臨床を極めようという者が多いということであろう。また、ブラックジャックやジョン・H・ワトスン（小説・シャーロックホームズより）などの、小説や漫画に登場する医師を理想と挙げた者もおり、医師を志すきっかけが多方面に及んでいることがわかる。

今年度も将来が楽しみな多くの学生が入学してくれた。本学で友人達と6年間切磋琢磨して医学を学びつつ楽しく学生生活を過ごし、日本を代表する医師となってもらいたいものである。

（4年　岡田真彦）





第97回慶應義塾大学医学部 生涯教育研修セミナー

日　時　平成24年6月9日（土）　午後3:00～6:00
場　所　東京會舘9階　「ローズルーム」
開会の辞　生涯教育研修セミナー委員長　鈴木　則宏
挨　拶　医学部長　末松　誠

講演会　「消化管癌の疫学と最新の内視鏡診療」
モデレーター　矢作　直久
（慶應義塾大学医学部腫瘍センター教授）
1「消化管がんの疫学と予防」
津金　昌一郎（国立がん研究センター がん予防・検診研究センター予防研究部部長）
2「早期消化管癌の内視鏡診断」
浦岡　俊夫　（慶應義塾大学医学部腫瘍センター講師）
3「消化管癌の内視鏡治療」
矢作　直久　（慶應義塾大学医学部腫瘍センター教授）
4「適応拡大を目指した新しい内視鏡治療」
後藤　修　（慶應義塾大学医学部腫瘍センター 特任研究助教）

参加費　無料
日医生涯教育制度参加証交付　3単位
（カリキュラムコード1、2、8、84）
お問い合せ　慶應義塾大学信濃町キャンパス総務課内
生涯教育研修セミナー事務局
Tel：03-5363-3611
E-mail：med-somu-3@adst.keio.ac.jp
セミナー終了後に意見交換会を準備しておりますので、ご臨席ください。

北里記念式の挙行について

本年は初代本学部長北里柴三郎先生の八十一年祭にあたり、医学部と三四会との共催によって左記により北里記念式を執り行うことになりました。三四会の皆様方のご列席の程をお願い申し上げます。

記
日　時　6月12日（火）午後1時
会　場　北里講堂

医学部長　末松　誠
三四会長　比企　能樹

予告

平成24年度慶應義塾大学医学部三四会定例評議員会を左記により開催します。

記
日　時　平成24年6月16日（土）午後2時より
会　場　新棟11階大会議室
1、報告並びに承認を求める事項
2、平成23年度事業報告
3、平成23年度会計決算
3、財産目録、会計事務処理並びに財産管理、監査報告議案
議案
1、平成24年度事業計画案
2、平成24年度会計予算案
3、その他

慶應義塾大学医学部三四会　会長　比企　能樹

鑑賞知来

2002年夏、学4だった私は国際医学研究会（IMA）の一員としてベラルーシを訪れた。チェルノブイリ原発事故の被害者支援をしている、チェルノブイリ医療基金（CMF）の支援活動に同行させていただいたのだ。以来、卒業後はCMFの理事として微力ながら支援活動に携わっている。

支援内容は、住民を対象とした甲状腺がん検診や医療機器寄贈、行政当局との意見交換から、若手医師の日本での研修受け入れまで多岐にわたる。私自身もほぼ隔年で現地を訪れてきた。しかし、昨年「想定外の事故」が福島で起きるまでは原発問題を自分の事として考えてはいなかった。

東日本大震災後、茨城の私の勤務先にも福島からの避難者の患者さんが多く受診された。情報もなくただ避難を勧告され、あるいは放射能に怯えて、住み慣れた故郷を離れなければならなかった人たち。それは、20年後の姿としてベラルーシで会ってきた人々の涙と重なって、私にとって重たく、悲しい出会いだった。彼らの悲しみに何も出来ないことがもどかしい。それからずっと無力感を抱えていたのだが、こんな中で明るい話がある。

IMAの後輩である現役学生たちが、今年の夏、CMFと共に現地を訪問するのだ。大震災・原発事故を受けて大きく社会が変わっていく中で、医師として巣立つ学生達が、真剣な瞳で「自分達はこの時代に何をなすべきなのか」と考え、まずベラルーシから学びたいと自らコンタクトをしてきてくれたことが何よりも嬉しかった。今年の夏、彼らが現地で見つけるものが、小さくてもいい、希望の光であることを望みたい。そして、彼らが持ち帰るものが、1人でも多くの日本国民、とくに不安な思いを抱えている原発事故避難民の方々の胸に、明るい灯をともすものであることを祈ってやまない。願わくば、諸先生方の温かいご支援も賜われば幸いである。

（わたクリニック　橋本すみれ　82回）